



TITLE:

<批評・紹介>吉川幸次郎著「宋詩概説」

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

---

CITATION:

宮崎, 市定. <批評・紹介>吉川幸次郎著「宋詩概説」. 東洋史研究 1963, 22(1): 88-93

ISSUE DATE:

1963-07-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152628>

RIGHT:

## 批評・紹介

## 宋詩概説

吉川 幸 次郎 著

一九六二年十月

岩波書店 中國詩人

選集二集ノ一 二四八頁

私等が學生だった頃、京都大學の東洋學を代表していたのは「支那學會」であつたが、その後次第に萎靡振なくなり、最近殆んど開店休業の状態に陥つたが、これには私もその責任者の一人として甚だ心苦しく感じてゐる次第である。併しそれには又それ相應の理由もあることなので、學問の細分化、専門化は別に人文科學にばかり限つたことではなく、自然科學の分野においても顯著に現われる傾向であり、いわば普遍的な趨勢といつてもよいであらう。いわゆる支那學が歴史と文學と哲學とに分化しても、分化しながら前よりも一層活潑に動いておればそれでよい。併し學問の分化が、そのまま互いに無縁となつていい筈はない。むしろ分化したためにこそ、前よりも一層密接に寄り添う必要を感じるようにならなければならぬ。何となれば分化は即ち深化のためであり、一つの學問を深化するためには、隣の領分に跨らないで出来ることではない。もつと端的にいえば、隣接科學に役立たぬような研究は本當の研究ではない。

吉川幸次郎博士の「宋詩概説」は近頃最も大きな期待と深い關心をもつて讀んだものの一つである。それは一つには、宋という時代

は私が大學の卒業論文の題目に擇んでから以後、最も長く私につきあつてくれた時代だからである。しかも實のところ私は宋代の詩や文章は殆んど讀んでいない。そこで見おぼえのある詩人や文人の名に出あつても、それが政治家でない限り、文學上にどんな地位を占めてゐるのかについても甚だ疎いのである。こういう偏つた智識をこの書によつて補いたいからであつて、この點に關しては私の願ひは私の力量に應じた分だけを卽座に満してくれたと信ずる。但しこの書中で指摘された、宋人の詩中にも社會經濟史の好史料が眠つてゐることは、前からうすうす感付きながら、まだ掘り起しにも着手していない。怠惰をしみじみ恥入る次第である。

他のもう一つはもつと重要な問題についてである。吉川博士の著書はいつも廣い視野と遠い見通しをもつて書かれてゐるので、私が最近考へてゐることを、この書が裏付けをしてくれぬかという期待であつた。と言へばすぐ、何だ、又もや内藤史學の時代區分論かと、すぐ反撥を感じる向きもなきにしもあらずだが、併し私の時代區分論は決して何時迄も同じ水平に止まつてゐるものではない。私は近頃、單に時代區分の問題ばかりでなく、中國經濟史の方法について、今迄よりも少し違つた角度から見直す必要を感じてゐるのである。實はまだ正面切つて公表するまでの準備が出来てゐないのであるが、大體の構想は述べる事ができる。それは中國史上には古くから、現今の世界に似たような景氣變動が行われていて、それが社會のあらゆる方面に影響を與え、この角度から歴史を見た時に經濟も文化も同時に視野の中に入つて來るのではないかという着眼である。

私は自身、社會經濟史研究者の一人に加えられてゐるが、この頃よ

く考へることは、いつたい今迄經濟史のつもりでやっていたことが本當に經濟史だろうかという疑問である。なるほど經濟の用語は使っているが、用語は何も經濟史の專賣品にはなっていない。經濟史という以上、やはり當時の人も皮膚で直接に感じ得た經濟現象を取上げねばならぬのではないか。萬人が感ずる經濟現象とは、要するに今年の暮しが昨年よりも良いか悪いか、來年は今年よりも良くなるだらうか悪くなるだらうか、或いはもっと長い期間をとつて、子の代、孫の代は、親の代、先祖の代よりもよくなっているかどうか、という相對的な問題より外にない。當時の人と憂憂を分か合える立場でなければ血の通つた歴史と言えない。そしてこのような經濟條件の變動を最もよく、一言でいい現わせる言葉は「景氣」である。ところで私が今までに到達し得た限りの想定においては、中國史上の景氣變動は次のように言い表わせる。そして、これに對して「宋詩概説」が如何なる反應を現わしてくれるかが、推理小説の山場以上に私にとって、スリリングである。

先ず私が描こうとする景氣曲線は、上古から前漢時代までは、概して上昇線をたどっていく。人間の生活は極めて徐々にはあるが、良い方に向つて行くのである。貨幣經濟も次第に盛んになってくる。もっと具體的に言えば、貨幣が手に入り易くなつてくるのである。これは單に支配階級ばかりのことではない。人民の地位はこれに伴つて少しずつではあるが向上してきている。勿論、當時の人民の生活が困苦に満ちたものであることは言うまでもない。要は前に比べての話である。

ところで「宋詩概説」はどんな反應を示すであらうか。曰く、古代的な樂觀とは、人間の運命よりも人間の使命をより多く説

く、儒家の古典のそれである。「詩經」三百篇について見ても、悲哀の詩の分量は、歡喜の詩のそれをこえる。ただし「詩經」の時代には、人間の善意が個人のまた社會の幸福を作り得るのが、少なくとも人間の本來であるとする樂觀が、失われていない。

「宋詩概説」にこれ以上古代についての詳細な記述を望むのは無理であるが、ここにあげた短い言葉からだけでも、著者の見通しは私の意見と一致していることが知られる。

ところが中國の社會は後漢頃から、一轉して不景氣時代に陥入する。これを個人の立場から言ううと、貨幣が手に入りにくくなつたのである。錢は一度手を離れたら最後、何倍もの努力をしなければ再び返つてこない。そこで各人は出来るだけ、錢を使わない工夫をするのである。そこに自給自足を立前とした莊園制度が成立する。この深刻な不景氣風は、時に立直りの氣配を感じさせながら、唐末五代まで續く。不況の影響するところ、單に支配階級を萎縮させたばかりではない。一般人民の地位も次第に低下して、豪族の農奴的な身分に落ちこんで行くのである。ところでこの時代について「宋詩概説」は何と言っているであらうか。曰く、

漢代以後、六朝の詩では、人間を絶望的な、悲哀にみちた存在だと見る見方が、詩の基調となる。絶望はまず、人間は微小な存在であり、その努力をこえた運命の支配下にあると見ることによつて生まれた。更にまた絶望あるいは悲哀は、人間の負うもっとも大きな運命として、人間の一生は死に至る短い頹廢の過程であると見ることによつて、深められた。その時期の文學と思想のすべてが、その方向にあったとまではいわない。少なくとも詩のジャンルでは、以上のような人生觀を地色として、希望よりも絶

望を、幸福よりも不幸を、歡喜よりも悲哀を、歌うのが、情性的な、しかしそれだけに強い、習慣となった。習慣は唐詩に至っても、清算されていない。

唐人の詩は、悲哀を止揚しない。悲哀に富んでいる。悲哀からの離脱を志した杜甫さえも、「一生愁う」といわれる。唐の末期、いわゆる「晩唐」の小詩人に至っては、悲哀、というよりも絶望、もっぱらそれを歌うのを、職掌とすることである。晩唐詩の代表者の一人、杜牧、……人間の歴史は、すべて絶望の連続であるとするのである。

恐らくこれには佛教の無常觀の影響もあったであろうが、兩者に共通する地盤として、身動きもならない經濟界の不況の重壓があったであろうというのが私の考えである。

ところが中國社會は宋代に入ってから、再轉して今度は好景氣の訪れを迎えるようになる。石炭を利用することによって火力を支配することの出來た宋代の産業は、銅鐵の製鍊を容易にし、銅は貨幣に鑄造されて商業を盛大にし、鐵は安價な工具に造られて、他の産業のあらゆる部門に能率を發揮させた。絹や茶や、時には陶器すらも世界的な商品となって中國の對外貿易を有利に導いた。好景氣は勞働の價值を高め、庶民の地位も再び向上しはじめ、内亂外禍も前代に比べて少ない。中國史上稀に見る平和な時代を現出せしめたのである。これが文學の上に反映しない筈はない。果して「宋詩概説」にいう、

宋人の詩を通觀して、まず感ぜられるのは、悲哀の詩の少ないことである。あるいは悲哀を歌つても、なにがしかの希望を残す。絶望ではない。宋人の多角な目は、人生は悲哀の部分だけで

はないことを、はつきり感ずるに至つたのである。哲學によつて、それをたしかめたばあいは、信念ともなる。

宋の哲學者たちの命題の一つは、古代的な樂觀の恢復にあつたように見うけられる。

これは文學史、ないしは思想史の上における甚だ大きな轉換である。

新しい人生の見方とは、多角な巨視による悲哀の止揚である。人生は悲哀にのみは滿たないとする態度を、それは底邊としてはじまる。このことは、從來の詩が、人生は悲哀に滿ちるとし、悲哀を詩の重要な主題として來た久しい習慣からの、離脱であつた。

唐人の詩が悲哀に富むのは、漢六朝以來の詩の連續として、人生を、死に至るあわただしい頽廢の過程と見るのが、詩の感情の基調となつてゐるからである。……宋詩はちがう。人生を長い持續と見る。長い人生に對する多角な顧慮がある。巨視がある。目は詩の生まれる瞬間ばかりに、釘づけにならない。また對象の頂點ばかりを見つめない。ひろく周圍を見わたす。故に平靜である。あるいは冷靜である。

然らばこの多角的な見方とは具體的にいつてどんな角度であろうか。その一つは哲學的な思索である。著者は言う。

宋詩の性質は、やや別の方向からもとらえられる。詩人がそれぞれに哲學を抱き、それを詩によつて語つたがることである。……人間の現實に對し、從來よりもきめのこまかな、あるいは從來よりもはばのひろい目をむける以上、人間とは何であるか、いかに生きるべきかを、一そう切實に考えるに至るのは、當然であつた。

次には日常茶飯事に對する、愛情をこめた觀察である。著者はい

すなわち日常の生活に對する觀察である。從來の詩人が見のがしていた日常生活の細部、あるいは事がらは見のがすべくもなく普遍に日常的であるが、あまりにも身近であるために、詩の素材とはならなかったもの、それらを宋人はさかんに詩にする。そのため宋人の詩は、從來の詩よりも、ずっと生活に密着する。

ここで著者は非常に面白い例をあげる。唐人の詩には酒が多く、宋人の詩には茶が多いという事實である。曰く、

ふたたび唐詩と比較して、一つのたとえを立てれば、唐詩は酒である。容易に人を興奮させる。しかし二六時中のめない。宋詩は茶である。酒のごとき興奮ではない。しずかな喜びをもたらす。それはまたたとえだけでない。茶をのむ詩は、宋の蘇軾、陸游に至って、はじめて盛んに現れる。唐詩には少ない。宋人も酒をのまなかったわけではもとよりない。しかし茶をのむ量が、唐人より多かったのである。

たしかに歴史的に見て、唐代までの社會はまだ十分に合理化されていないで非常に無理があり、公私ともアンバランスな生活を餘儀なくされていたようである。唐人が必要以上に深酒を嗜むのは、確かに欲求不満の現われである。唐代までの生活は、たとえ貴族であつても、外観が豪奢なように見えながら、實は内容の甚だ貧弱な、粗末なものにすぎなかった。料理はまずく、器物はきたなく、着物も垢じみていたにちがいない。その上に政情も經濟界も不安定であつたから、そのように貧しい生活さえ、いつ何ん時、根柢からひっくりかえされるか分らない。こういう時代には酒でも呑んで一切を忘れ

るより外なかったであろう。その酒も決してうまくはなかった。ただ人を酔わせる力だけがあつたのである。

それが宋代になると、生産力が向上し、輸出超過で好景氣時代に入る。外敵とは金錢で平和が確保されるし、官吏は減多に殺されたり、家族が奴婢に落されることもない。生活にゆとりが、出来ることもに調和がとれるようになった。料理も酒もずっとうまくなったが、それには節制を加えねばならぬと悟れるようになった。小金がたまればそれを死蔵することなく、商人にかしつけて利息をとることも出来、借家業を営むことも、額に相應した土地に投資することでもできた。金持だけがらくをしただけではない。貧乏人でもそれに應じた散財をして飲食を樂しめるようになった。完成された陶器は上下の別なく用いられて食味をそそった。今から考えるとそれ以前、唐代の人たちは金屬器や木盃や、土器に似た三彩でよく酒が飲めたものだと思ふ。正に著者のいうように、

宋の人々の生活環境が、それまでの中國のそれとは、劃期をえがいて、現代のわれわれに近づいていた。

のである。このような社會狀勢の下で始めて詩人も日常生活の中に喜びを見出すことができるようになったのであろう。

ここで一つ氣になることは、宋代の詩人が政治を視野の中にとりいれるようになったことを、著者が「連帶感」という言葉で表現している點である。そしてその理由を、

詩人の多くが、市民の間から出て、一般の人々の生活を、よく知っていたということがあつたであらう。

としておられる點である。たしかに宋代の支配階級たる官僚と一般庶民との距離は、前代に比べてずっと縮まってきている。別に大し

た家柄の出身でなくても、宰相になって廟堂に立つことができた。この點、近頃の歴史家の傾向が、官僚を封建的支配階級とし、多數の勞働者を農奴と規定する傾向は是正するを要する。併し我も彼も同じ社會の一員だから、その生活について責任を分かちあわなければならぬという所まで行つたかどうかは疑問に思う。詩人が政治に責任を感じるのには、私はむしろ官僚としての自覺ではないかと考える。即ち、「君を堯舜にす」べき筈の官僚たる自身がその任務を遂行しなかつた自責の言葉ととりたたい。いいかえれば、君臣一體、天子と官僚とが休戚を同じくせねばならぬという面がまっさきに胸にびんと響いているのではあるまいか。蘇東坡などもそうであるが、宋代の官僚はぜひふん官僚の特權を主張して、人民の迷惑を無視する行爲を一方では臆面もなくやつてゐるからである。我田引水の説になるが、宋代以後の官僚は、科擧によつて密接に天子に結合され、天子を通じて人民の安寧に責任をもつような氣風を醸成した。但しその奥には、やはり人間は本來平等で、萬民はその貧富に應じて幸福な社會生活を送る權利をもつという原則が、たとえ原則としても認められていたことは否定すべくもない。

さて再び私の景氣史觀の立場に戻るが、宋代以後の景氣變動線は大體上昇の方向を辿るが、但し一直線上上るのではない。前代の景氣變動線においても、それは決して單純な上下ではなく、そこには別に二次的な短い周期の上下線が入り雜つていたので、ただそれあまり強く現われなかつたところ、宋以後になると、この短期變動線が著しく現われるようになり、その周期は大體、一王朝の興亡と平行する。

北宋時代の好景氣は南宋に入ると下り坂に向い、景氣の沈滞、更

には不景氣が訪れてくる。これは朝廷の財政不如意が不換紙幣の濫發を餘儀なくし、その結果が貨幣の死藏、海外への流出を促したからである。このような世情は文學の上に如何に響いたであらうか。著者はいう。

以上のべて來たような宋詩の諸性質は、それにさきだつ唐詩の性質と對照的であるとする認識がある。認識は、宋自體でも、その末年にはおこつてゐる。

北宋末の過渡期が、しばらく晚唐詩の悲哀を祖述したのは別として、南宋末にはふたたび晚唐詩への郷愁がおとずれる。

彼（陸游）の詩は、從來の宋詩、ことに北宋の詩とは、印象を一にしない。もはや悲哀を拒否しないのであり、感傷をあらわに示す。あるいは感傷こそ、大海のような彼の詩の、平均した地色であると思われる。……北宋の詩がしばしば示した過度の冷靜、それに對する反撥が、彼にはあつたように思われる。反撥は、詩壇全體の問題として、南宋のはじめから、先輩たちの間に、すでに動いていた。前章で説いたような唐詩への郷愁は、そのためであつたと思われる。

もちろん、既に北宋を経験したあとの南宋であるから、それは決して唐人の人生觀そのままでないことは、著者が何度も念をおしてことわつてゐるのであるが、私はいま私に都合のいい個處だけを引用したのである。どうも私の景氣史觀は非常によく文化の上に反應を示すことが確かめられたらしい。

前述のように、宋以後の中國經濟界の景氣は、だいたい一王朝の存續期間を周期として曲線を描く。これがどの程度に文化の上に表われるかが甚だ氣がかりである。というのは、著者によれば、

元以後、清に至るまでの詩の歴史は、唐詩、宋詩、そのいずれを模範として祖述すべきかを、課題として發展して行つたといえる。

平均していえば、唐詩の祖述された時期の方が多い。

とあるのみで、その詳細を知り得ないからである。私の立場からいえば、時代が下るに従つて文人の生活は時の景氣と密接に結びつく。それは文人のアルバイト、或いはそれ以上に重要な収入源となる潤筆料の多寡が、景氣の好し惡しによつて左右されたに違いないからである。だから私としては、王朝の盛時たる好景氣時代には宋風であり、初期と末期が唐風であつて貰いたいところであるが、それは簡単に問屋がおろさないかも知れぬ。同じ著書による次の書物、「元明清詩概説」が人一倍、私に待望される所以である。但し著者のいう、

もし宋詩が排他的に祖述された時期を求めるならば、前世紀後半の清朝末年に至つて、はじめてあつたといつてよいかも知れない。

とあるのは大いに人意を強くするに足る。というのは、清朝末期には景氣の地域差が非常に甚しい。中國の奥地は、嘗ては異常に榮えたところでも、文化に取殘されると共に、經濟的な荒廢が支配する。これに反し、大都市、開港場、特に外國の租界には變態的に好景氣が展開された。こんなことをいうと、そこから叱られそうだが、當時の知識階級は、一方では外國の侵入に反撥を感じながら、一方ではヨーロッパの物質文明に限りない信頼を寄せていたのである。宋代の文化をルネッサンスとすれば、清末の文化は、たとえそれが借物であろうとも、産業革命である點には變りがなかった。宋

詩が前代にもまして模範とされたのは必然の歸結であつていい。

むかし蘇東坡が司馬溫公のために行狀をつくり、長文一萬言に垂んとするが、その半ばは王安石に對する非難を以て占め、古來この種の文體なし、と稱せられた。ところで私の「宋詩概説」の紹介は、自分の意見を述べることに半ばを占める結果になり、紹介の體を失したとの譏りをうける虞れがないでもないが、但しこれには理由がある。その一は、私はこの書の紹介のために、私が考案した觀測氣球を始めて打ち上げてみたのであり、従つてその構造を説明するのに言葉をこれ以上省略することが出来なかつたからである。その二は、著者は大體において私の考える歴史上の意見に同意されていると信するので、私説を語ることが同時に著者の意見を敷衍することにもなると考えたからである。最後に諸科學は互いに意見を持ちよることが學問の進歩に必須の條件であり、「支那學會」の精神は、その外觀に拘わらず、我々の心中から決して消失したのでないことを、この機會に表明したかつたからである。(宮崎 市定)

### 秦漢政治制度の研究

鎌田 重雄 著

昭和三十七年十二月

日本學術振興會發行

A5判 五七八頁 索引八頁

漢代諸制度の研究者として夙に令名の高い著者が、各種雜誌に發表されて來た論文を、一本にまとめて出版されたことは、我々後進